

いづくか

<めざす学校像>

- 創造する学校
- 信頼される学校
- 相談できる学校

NO. 6 令和元年10月1日 川口市立飯塚小学校 児童数649名 20学級

新しい働き方、新しい生き方 ～第73回読書週間に寄せて～

校長 小堀 壯一

神無月。彼岸を過ぎると日暮れが早まり、夜がだんだん長くなります。テレビを消して本を手取る、そんなひと時を増やそうと思います。

先日、久しぶりに帰省した息子が一冊の本を薦めてくれました。題名は「コミュニティナース まちを元気にする”おせっかい”焼きの看護師」我が子から本を薦められるとは……。戸惑いをもったまま、表紙をめくってみることにしました。

著者である矢田明子さんは、人口減少社会を先行している島根県雲南市で、日本の「コミュニティナース」の草分け的存在の一人として活躍されている方です。「コミュニティナースって何？」保健師や看護師の類かと思って読み進めたのですが、どうやら違うようです。「コミュニティナース」は、資格制度で定義されている職ではなく、組織に縛られずに柔軟に発想して、人と人との出会いやご縁を大切にして幅広く活動し、地域の様々な困りごとにとことん付き合っている存在という概念のようです。

矢田さん自身もそうですが、本に登場する方々は、生き生きと働き、生き生きと暮らしています。しかも実に楽しそうです。あるコミュニティナースの方は、看護師資格をもちますが、それを振りかざすのではなく、集落の人の薦めで村の誰もが利用するガソリンスタンドを拠点とし、日頃から気軽に相談にのり、ついでに健康相談をしているそうです。私たちは、病気になってから病院という非日常的な場所で医師や看護師という専門職の世話になります。それとは対照的に、コミュニティナースは身近にいて気軽に相談できる存在として元気なうちからその人その人にあった支援をしていく。そこには押しつけがましいことは一切なくて、まるで親友のようです。

今、矢田さんのように、新しい働き方、新しい生き方が全国各地で始まっています。私事で恐縮ですが、昨年、さいたま市から大分県の里山に移住した娘は、森の中の幼稚園で、集落の人々と濃い関りを結びながら喜々として働いております。園児と野原を駆け回る、お散歩の途中で農作業のお年寄りとおふれあう、そんな暮らしをしている我が娘の姿と重ねつつ、あっという間に最後のページまで読み進めてしまいました。

文化の日を中心とした 10月27日～11月9日の2週間は、読書週間です。2019年 第73回読書週間の標語は、「おかえり、^{しおり}葉の場所で待ってるよ」 この秋、一人でも多くの方に本との素敵な出会いが訪れますように。